伊藤銀月先生著

最新研究 忍術と妖術

東京 梁江堂發兌

伊藤銀月先生著

最新研究 忍術と妖術

東京 梁江堂發兌

伊藤銀月先生著

最新研究 忍術と妖術

東京 梁江堂發

本書の挿繪

目次

相馴び、青年の仰慕、頗る厚きものあるに至れり、其の経歴を観るに秀吉のそれに、頗似するものあり、蓋し銀月の如きは、之れを商人たらしむるとも、軍人たらしむるとも、文士として彼が贏ち得たる程の名を保たんことは易々たる可し、秀吉は家康に比して、華美を好めり、陽気なことを好めり、奇を好めり、銀月にもまたこの性癖あり、此の性癖は彼れをして一方に成功せしむると同時にまた敵を識れり。此を知らんとならば、まづ文史の小説『平凡ぎらひ』を繙け、哥の面目を窺ふを得ん。人有り曰く、銀月は法螺吹きなりと、然り銀月は法螺を吹く男ならん、されど悲しいかな現代文士の多くは意気頗る揚らず、よし法螺に止まるとするも、吾人は銀月の哥を壯とするものゝ多々なるを喜ぶ彼曰く

自分は將來何かやらうと思つて居る、今の二十や二十一二の青年を見ると、其のいやに老成して居るのに驚くのである、いかにも大人振つて習慣のやうな子供の心で居るものとは語が合はないのが多い。我輩二十四五の時に自分はまだ子供だと思つてから十餘年このかた少しもフケないやうである自分もさう思ふし人もさう云ふ。

何かやらうと思ふといつて、銀月哥、頃日、真面目に忍びの術に身も魂も打ち込んで居るさうな。「睫毛に止りて目を遁れよ」とか「繖蓋の下に萬兵を伏すべし」とかいふ秘訣に合するやうにと、物理的に研究して居るとか聞く、奇を好む哥は何を造り出すか分つたものぢやない、何にせよ、哥は哥の特色を發揮して、小文士の列を遠く脱して、痛快な天下を動かすやうな事をやれ。

が、ボートレエルが何だとか、ゴンチヤロフが何といつたとか、新はなければ、恥かのやうに思ひ、下らぬ問題、殆んど説明も辯論も要しないことにまで口を入れなければ人に後れたかに焦心し煩悶し、自己の姓名の、新聞雑誌に載るといふよりは、自己の愚を一般に知らせると氣附かず載せたがることに急であつた。昨年頃の僕見たいな意見で居る自稱文士、自稱詩人とは違ふ、文章詩歌は自分の意見感情なりを表白するに便利な者であれば、餘暇に引籠思案するのも宜くないが、所謂當今の青年文士の多數のやうに名ばかり求むるに急で、その安つぽい文士といふ名を失墜しないやうにと、そんな小さい所にクヨ／＼して居るのは、餘り賞められたものでなからう。論人は、自家を吹聽廣告するとを悦ぶ者だ、僕とても其一人でないとは云はない、此處に此な事を書いて、かく云ひ乍ら自己の愚を表白しつゝあるのだから、今とて、えらさうな口は利かれないが、併し、希望は見識を深くし高くし、今の僕、今時の文士といふ者の多數とは異ならうと念じて居る。語を換へて言へば、文士として優れる前に、人間として優れたい。此處だ、此處が鐵月と評家が意見が合ふ。鐵哥が、豐太閤を惡人だといふのは彼の心の聲だ、口先きだけの聲でない。彼は、小さい時から隨分腕白であつた。而て未來の蒙古王を以て自ら任じ、其爲めに心身を鍛錬したと云つて居る。彼、一度は足尾銅山坑夫の下働きとなり土方の手傳ひをなし乞食同樣の眞似をなし、一度は監獄にあつて煉瓦製造業に從はんとし、一度は田舍の雑誌記者となり、萬朝報の黒岩周六に書を寄て、忽ちに新聞記者となり、一種奇妙な論筆に人を醉はせ、二六新聞社に入て、才媛竹内まさと懇懃を通じ再び萬朝社に歸りまさ女を迎て妻とし、時に小説を書き時に紀行文を書き時に評論文を草し、聲名大町桂月と

伊藤銀月氏

正富汪洋君評

（東京エコーに掲載せられたる一文を乞ひ得て序に代ふ）

銀月哥、名は銀二、明治四年十月二十一日、秋田市は諏訪町に生れた。銀月、口を開けば則ち言ふ、『乃公は所謂今の紛々たる文士ぢや無い』又曰く『乃公の戀人は攝政關白豐臣太閤だい』と其言ふ所に違はず、哥は當今の、青い面をして、豆腐ばかり喰つて、何でも無いことをソイヤイ騷ぎ廻り、針の端で突いた程のことを、天下の大事のやうに心得、平凡な詩歌をこれ見よがしに、書きつらね神經衰弱を誇りのやうに考へ、風が白いとか、君が笑ふとか、何とか彼とか珍妙なことをほざき、ヤレ、オスカーソイルドが如何したと

最新研究　忍術と妖術

伊藤銀月著

忍術の新研究

◎強ね者いたづら者

何新聞かに、銀月は忍術の研究をして居るさうだが、豈夫食ひはぐれて泥棒をやる氣でもあるまいと書いてあつたと、我輩は見ないが、人が來て知らして呉れた。全く其通りだよ、人は誰でも三分の泥棒根性のないもの

が無いと云ふから、我輩にしても先天的泥棒根性を持つて生れたに相違無い、寧ろ、普通の人が三分なら我輩などはそれを五分も六分も持つて居るかも知れないのであるけれども、縦令我輩は泥棒を試みやうとする者であつても、忍術は決して泥棒術でないから、これを利用する譯には行かない、假に又これを泥棒術だとしても、今の世の中のやうに泥棒が容易く出來るのでは、忍術も妖術も要つたもんではない、今の世の中で泥棒をやるには、麻醉劑さへあれば十分である、それも醫者の證明が無ければ買はれぬ藥品なら些と面倒だが、冗談ぢやない、今の

世の中では砂糖迄が麻醉劑の働きをするんだよ、之れに中てられて泥棒の手先になつた代議士が澤山あるぢやないか。

閑話休題、世の中が色と慾とに固まつて、榮耀榮華を極めやう美人を自由に弄ばうとの爭ひを、露骨に腕ッ節でやる戰國時代には、人材盡く武門に集まつて、其他の方面には屑ばかり殘る事になる、すると又、たつた一人で時代に反抗し、天下の英雄豪傑を十六羅漢の木像が並んだ程にも思はず、自在にそれ等を翻弄して打興ずる所の、途方もない強ぬ者いたづら者が必ず出て來る、昔支那の

三國時代に魏の曹操が姦雄の資を以て天の時を得たとある、所がこゝに左慈字は何とか云ふ妖術使ひが現はれ、天遁地遁人遁三卷の天書を得て能く通力自在なるに至つたと稱しつゝ、曹操の前に出しやばり、散々惡戯をして曹操を惱まし、到頭一世の姦雄を激しい神經病に罹らした、此妖術は忍術の一種である、即ち妖術使ひの左慈は忍術者の左慈である、「さじ」は「さじ」でも、本願寺の坊さんからユニテリアンになつて而も金儲の上手な佐治實然先生とはちがふのである、それから、我輩の親分秀吉を拈り殺さうと忍び込んで遣り損ひ、あべこべに秀吉を

天下第一の大泥棒と罵倒して釜揚にされた石川五右衛門、一國一城の主は愚か、一方の旗頭ともなり得べき可惜器量を持ち乍ら、こんな飛んでもない眞似をした強ね者いたづら者さ加減は、我國に於ける空前絶後といふべきであるが、此男の忍術者であつたことは、我輩の紹介を待たず誰でも知つて居るのである。

扨又、アレキサンダーにからかつた樽犬先生ダイオゼネスに至つては、自然に忍術の極致に達した點に於て、更に左慈以上五右衛門以上である。

何も、忍術は強ねる術だの惡戯する術だのと矢鱈屁鱈に

卒強ける譯では無いが、徹底時代に反抗する拗ね者いたづら者が自己の特色を發揮する術として見るに至つて、始めて大に振ふのである。

世の中が色と慾とに固まつて、榮耀榮華を極めやう美人を自由に弄はうとの爭ひを主とすることは、戰國時代と今と同じで、唯異なる所は、腕ッ節で野獸的に撃ち合ふ代りに指先で算盤珠を彈き合ふと云ふだけである、随つて現代の人材が財界にはかり偏して集まるも、止むを得ない數と云はなければならぬ、他の方面には皆人材の進路を妨げる障壁が設けられくあるのに、財界ばかりは、

丁度戰國時代に、匹夫手に唾して起つて風雲を叱咤するの快事が出來たやうに、苟くも能あれば空拳から鉅萬の富を產することもむづかしくないのである、行德の徒の之に趨くは

當然であらう、それに、腕力さへ揮つて居れば政界は易々と動かされるのであるから堪らない、一歩を進めて云へば、戰國時代のそれが武門にばかり集まつたやうに、現代日本の人材は財界にばかり偏つく、政界は寧ろ其御餘りを頂戴し、學界文界に至つては、御餘りと迄も行かずに、人間の屑や糟の棄場なる掃溜の用をなして居るに過ぎぬのである、情けないぢやないか。

戰國時代から腕ッ節を磨いて色と慾とを凝した上に錬磨を加へた今の世の中は、強ね者いたづら者としての忍術者を出してもいゝ時代ではあるまいか、けれども、

かう云つたからとて、我輩が其たつた一人で時代に反抗する強ね者いたづら者にならうとするのではない、我輩は唯だ強ね者いたづら者たるべき要素ある人に其なり方を傳授するだけである、我輩は寧ろ、左慈、五右衞門、ダイオゼネスとならずして、曹操、秀吉、アレキサンダーとなりたい方である、強ね者悪戯する方でなくつて強ねられる方悪戯される方になりたいのである、同じ曲亭の先輩に博文公と云ふ流行ッ子もあるぢやないか。

そこで、忍術とはどんなものかとの問ひになる。

◎忍術とはどんなものか

今の世に忍術の研究などゝは馬鹿げて居るぢやないかとの冷笑に對し、躍起となつて辯解し説明せんことを要する程、左樣に我輩は或る一派の神經病患者連にかぶれはしない。

けれども、御嶽教の行者がやる火渡なるものゝ如き詰らない事でも、學者だの識者だのと云ふ偉い先生達が集まつて態々試して見るのに、世間は別にそれを不思議とも仕ないぢやないか、そこで我輩は唯一つ、忍術と云ふものは、そんな火渡のやうなペテンの種類でもなければ、心靈の現象が起つたとか轉んだとか云つて、湯の中で放ッた屁を捉へやうと騒ぐ連中に、擔ぎ出さるべきものとも、いさゝか性質がちがふと云ふことを、ちよつと斷つて置きたいのである。

そんなら、忍術とはどんなものか、さア愈此難問に對して兎に角辻褄の合ふ解答を與へなければならぬ羽目に、我輩、我身を押付けて了つた、今更逃げやうとて逃げられはしない、自分ながら物好きな男である、苦勞性の人間である。

なアに、石川五右衛門や鼠小僧の傳で、泥棒其他碌でもない事をする門人に知れないやうに忍び込んだり忍び出たりする方法が忍術さ、火移りのいゝ兄さんは直ぐ解答を與へる。成程、我輩とてそれは忍術でないと斷言は出來ない。けれども御氣の毒ながら、忍術の部類は忍術の部類でも、それは忍術の糟粕に過ぎないのである、忍術の垢に過ぎないのである、垢も垢爪の垢ぐらゐの所である、そんな事が忍術なら、今の泥棒や刑事の方が昔の忍術者より餘程進んだ研究をして居るであらう、今の泥棒や刑事を前に置いてそんな事を解説したら、寧ろ陳腐だ幼稚だと云つて笑はれるであらう、我輩のこれから新研究を試みやうとする忍術は、そんな薄く淺い部分ではない。

再びそんならと云ふ、そんなら銀月の所謂忍術はどんなものか、忍術の傳書には、「忍術の忍と云ふ字は、忍び込むの忍ではなくつて、耐え忍ぶの忍である」と云ふ意味が說かれてある、一體傳書などゝ云ふものは、何の道に限らず、極くだらない牽強附會を勿體らしく並べ立てゝあるか、左無くば、賣卜者の出鱈目に禪坊主の囈語を加味したやうな無意義の文字を行列さしてあるもので、

此「忍」の字の解釋も多少臭氣を帶ぶるを免れないが、扱つて見ると何時しか臭氣が忘れられるのである。

或意義に於ては、忍術は此の忍耐する術である、極度の忍耐即ち忍術の極意である、而も、忍耐の他の一面は努力、一つの事を消極的に意識しては忍耐と云ひ、それを積極的に意識しては努力と云ふのであるから、極度に忍耐する術でさうして極度に努力する術である、忍術は忍術の一端は武術と結び着き、他の一端は禪と結び着いて居るが、本質としての忍術は武術でも禪でもなくつて唯だ忍術である、極度の忍耐と努力とを基礎とした一種

の心身鍛錬法である、これが忍術の堂奥である、昔は將軍でも諸侯でも厚祿を以て忍術者を抱へ、加之苟くも武藝者と云はれる程の士で多少忍術の心得の無い者がなかつたも、豈偶然ならんやである。

そこで、我儕は此心身鍛錬法としての忍術を問題として、いさゝか新しい研究を試みやうと思ふ、なほ進んでは、火遁の術、蝦蟇の術、鼠の術等所謂妖術に屬する範圍にても足跡を附けなければならぬ、是等も皆忍術の範疇内だからである。

◎忍術の堂奥に屬する部分

忍術も其堂奥に入ると、一種の心身鍛錬法として見なければならぬものになると云ふことは、前に述べた通りである。

忍術の本義は、詰まり極度の忍耐と努力とを以て精神と身體とを過不及なく鍛錬し、機に臨み變に應ずるに備へるに在るのである、けれども、單に斯うばかり云つたでは空言たるを免れないから、これから段々云ふべく且つ行ふべき題目に入らうが、先づ呉々も讀者はよく呑込んで

置いて頂かなければならぬは、精神と身體とを過不及無く鍛錬するといふ點である。

何の道でも、皆精神が第一と云つて居る、けれども、いくら精神ばかりを鍛錬しても、身體の鍛錬がそれに伴はなければ、底が十分に固まるものではない、身體を磨り耗らしての精神の鍛錬は、鍛錬でなくつて打壊しである、御釋迦樣でさへ、こんな遣り方の間違つて居ることを悟つて、女が呉れた牛乳で衰弱を補つたとあるではないか、精神ばかりを矢鱈に鍛錬しやうと掛ると、却つて神經が病的に過敏になるのである、さればと云つて、身

體ばかりを無暗に鍛錬して精神のそれが御留守になると、相撲取や競技運動の選手に餘り怜悧な人間が無いと同じく、頭腦が少しぼんやりになる、どちらも妙ではない。

所が、何の蚊のと牽强理屈は云つても、眞誠に精神と身體との鍛錬が過不及無く伴ふものは、忍術を措いて他に無いのである、他のは、何れを見ても、精神の方に偏らなければ、身體の側に傾くものばかりである、武藝柔術なども精神が第一だとは云つて居るが、嚴密に云へば實際身體の鍛錬が主となつて居ることを蔽はれはしない、忍術は何も精神と身體との鍛錬を相伴はしむる方法とし

て認めらるべきものではないが、性質上是非それを過不及無く仕なければならないので、自然に根本的修養に資すること多い結果となるのである。

で、愈々本題に入らうが、忍術には第一から第四迄の重なる練習がある、第一、「呼吸を整へる練習」、第二、「身輕く動き足疾く歩く練習」、第三、「變と難とを堪へ、凌ぐ練習」、第四、「武藝柔術其他器械的練習」、是れである。

ちよつと考へると、第一から第四迄何れも身體の鍛錬が主になつて居るやうであるが、實際精神の鍛錬を一歩も後れぬやうに伴はしめなければならぬ内容は、呼吸を

整へる練習を第一に置いて、武藝柔術などの練習を第四に下げてあるによつても、略ぼ窺ひ知られるであらう、此呼吸を整へる練習と云ふは、文字通りに解釋すると何んでも無い事のやうであるけれども、忍術の玄妙は實に此一點に在るので、蝦蟇となり、鼠となり、水に化し石に化する等の神變不可思議も皆これから出るのである、豪傑となり、英雄となり、悟者となり、覺者となり、聖人となり、至人となり、仙となり、神となるも、皆此所に所謂呼吸を整へる練習の結果に在るので、精神と身體との鍛錬の積極的に相伴ふこと、之に過ぐるものはないの

である。

次には、第一から始めて實地に鍛錬の仕方を解說しやう。

◎呼吸を整へる練習

忍術の鍛錬の第一に置かれてある「呼吸を整へる練習」とは何であるか、曖昧な言語を用ひずに、はつきりとくふ、解説すると、つまりどんな場合に臨んでも、呼吸をする音を人の耳へ入れぬやうにする練習である、否、他人の耳へ入れぬやうにするのでは不可い、自分の呼吸が自分の耳へも聞えないやうに練習するのである、他人の耳へ入らないやうにとの標準を取つては屹度他人の耳へ入る、自分の耳へも聞こえないやうにと練習して、始めて纔に他人の耳へ入れないことが出来るのである。

扨て、此呼吸を整へると云ふは、却々むつかしい事であつて、からだの具合が好く、氣血の循環が整ひ、飲食物と大小便との關係も至極順當な上、心には何の思ひ悩む事も案じ煩ふ事も、迷ひ惑ふ事も、怕ぢ恐れる事も悲み慟く事も無く、疾く歩いた後でも重い物を持つた後でも無く、泰然として靜坐すること良久しい時には、誰でも自分の耳へ聞えない程に呼吸することが出来るが、毛一と條落しても鉢に湛えた水は波を立てる、些かでも心を動かし身を動かすと直ぐ息が弾むのである、況して、非常

の、艱難に出つくはして、體が仕の如くに躍り胸が塊の如くに響く時にも、深く靜かに平生と變らぬ音のしない呼吸をすることを求めるは、大風の時に湖の波立たぬを望むと斉しく、くんで無理の注文らしく思はれる。

所が、練習の結果それが尋常に出來るから面白いのである、それの出來るのが些とも不思議でないのである。

昔は「臍下丹田に氣を鎭める」と稱して、武人と云はず文人と云はず少しく心ある者は皆一樣にそのやり方を練習したものである、これは精神と身體とを相俟つて凝定させる方法で、如何なる急變に遭はれ危難に臨んでも

胸騷ぎ息迫ることが無いやうに鍛錬するのである、臍下丹田に氣を鎭めるとは、要するに或る形容に過ぎないので、今日の學語で云ふ腹式呼吸を強く深く極度にやり、身體精神共に凝定不動の域に入るべく、如何なる場合にも高低を生ぜぬやう呼吸の整一を練習するのが、即ち臍下丹田に氣を鎭めるの法である。

腹式呼吸とは、一口に云へば胸で息をせずに腹で息をする事である。今少しく着實に云へば、空氣を吸ひ込む時胸を左右に張つて受けずに、腹を下部に張つて受けるのである、之を極度にやると、下ツ腹に吽と力を入れく

腰で答へ、深く〳〵臍の下迄吸ひ込んで臍の下から吐き出す心持に呼吸をするやうになる、練習の仕始めは少しく具合が悪く、氣を附けないと何時しか胸を左右に張る胸式呼吸に後戻りするが、十分に練熟して了ふと自然にそれが出來るのである、但し、それは唯機械的に進るのでなくつゝ、意識が常に呼吸に伴ひ、最低の部分を基礎として確かに之を踏み占めつゝ呼吸の出入を監督し、而も監督される呼吸は監督される壓力を感じず、監督する意識は監督する苦勞を忘れるに至らなければならぬのである。

斯くて始めて、身體精神共に凝定不動の域に入るので、驚いても恐れても心騷がず、動いても跳んでも息苦しくなく、心の騷ぎが伴はつて身を動かすに至らず、身の動きが感じて心を騷がすに至らず、如何なる艱難に出つくはしても、呼吸をする音を人の耳に入れないやうになる、武藝者はよく不動心と云ふが、一面から見れば不動心他の一面から見れば不動身、二つの物一つで一つの物二つである。

單に獨り忍術の鍛錬の爲に限かるゝのみならんやである、こゝに所謂呼吸を整へる練習が十分に出來上つたら、地

球以外に飛び出く地球を自分へ引寄せることも亦左程難くあるまい。

◎身輕く動き足疾く歩く練習

根本たる呼吸を整へる練習が出來上がつたら、今度は第二に應ずる「身輕く動き足疾く歩く練習」である。

これには種々の器械的練習が必要である、器械體操は御座れ、鉄棒運動は御座れ、宙返り、鯱鉾立、足藝、珠乗、何んでも蚊でも、取つて皆練習の資となすべしである、けれども、單に器械的練習ばかりではいけない、精神身體共に凝定不動の域に入るべく呼吸を整へる第一の練習を土臺とすれば、此、身輕く動き足疾く歩く第二の

練習は、土臺の上に柱立てをするのである、一擧手、一投足も土臺を離れて仕てはいけない、況して、毛程でも土臺に疵を附けるやうなことがあつては、却つて練習せぬに劣ること甚だしい結果となるのである。

若し十分に出來上がるなら、呼吸を整へる練習一つだけで、忍術は勿論、妖術でも魔術でも神仙術でも、何でも追つて退けられるが、身輕く動き足疾く歩く練習だけでは、郵便配達か人力車夫ぐらゐの外に勤まる役目が無いのである、深く此第一と第二との關係に通曉しなければならぬ。

第二の練習には、先づ食物の選擇と筋肉の運動とで、瘦せて締まつて強い身體を造るのが肝要である。ぶく〳〵肥りの豚のやうな體では、てんで物にならないのである、豚のやうなと云ふ程でなくとも、肥つて居る軀はどうも不合格である、斯う云ふと、銀月貴樣も肥つてるぢやないかと一本參られるかも知れないが、我輩が今肥つて居るは、坐つて筆を拈くる時間が多いからである、其爲め一種の病に罹つて居るのである、筆の中毒とでも云ふべきであらう、けれども、何時でも筆さへ打棄つてぴん〳〵飛び廻つたら、直ぐ瘦せるに極つて居るから、別段苦にも

しないのである、同じ鯖の中毒でも、青くひよろ〳〵した女の腐つたの見たいな料簡を持つてる奴より良い、だらうとは、此と負け惜みかも知れない。

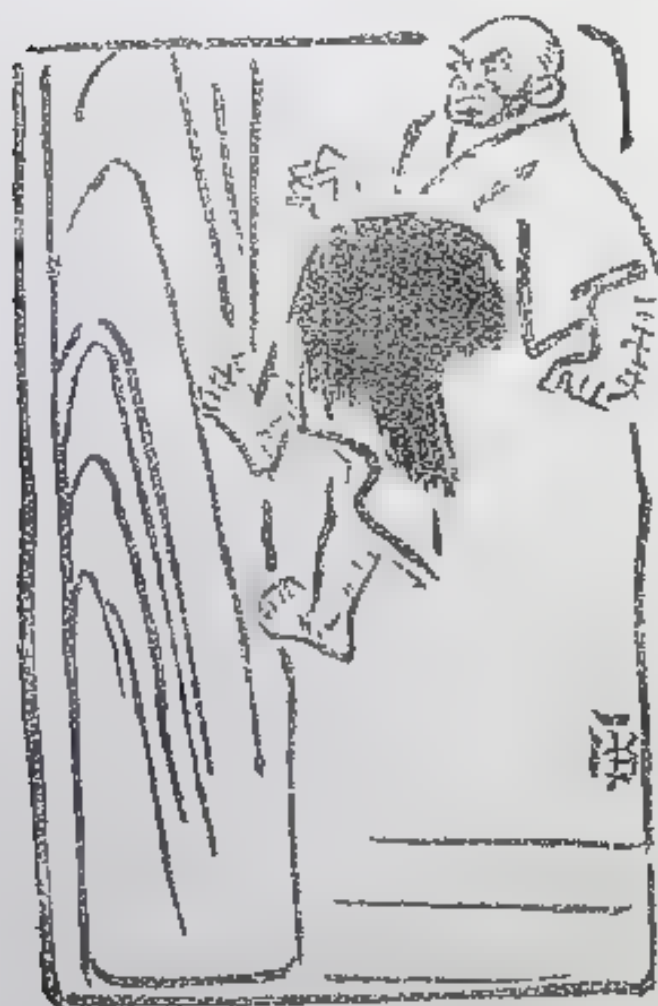
や、これァ横道へ反れて済まなかつた、そこで此、食物の選擇と筋肉の運動とで、痩せて締まつて強い身體を造ると云ふは、今の端艇や野球の選手が取つて居る方法と同じで、先づ食物は、油濃くなくて、人體に吸收さるべき養分を多量に含む肉類菜蔬を、適宜に調和して適度に胃の腑へ送り、さうして、あらゆる單獨運動、對抗運動、競技運動を、精力のあらん限り極度にやるのである。

所が、こゝで反對の議論に見舞はれさうである、過度運動は却つて體を壊す弊があり、競技運動の選手は頭腦がぼんやりになつて、他の事には役に立たないと云ふ實例のあるのをどうする、と突込まれさうである、けれども、それは無意義な運動ばかりするに就いての弊を云ふのであつて、明晰に云へば我々の云ふ所とは問題がちがふ、吸收を整へる第一の鍛錬を充分に遣つた上での運動は、いくら猛烈に試みても決して過度にならない、唯だ遣り盡くす極度があつて、遣り過ぎる過度はないのである、決して心配には及ばない。

固より、運動の爲めに運動をするのではない、第一の練習で呼吸を整へた効果を、實地忍術に應用する初歩として之を爲すと共に、果して、充分に呼吸が整つたか否かを試驗する方法として之を爲すのである、更に進んでは、此問題の底をたゝいて、「誰にも出來ない平凡の術」と、「誰でも出來る不思議の術」との研究に移らなければならぬ、それは次回に譲らう。

◎誰にも出來ない平凡の術

平凡の術なら誰でも出來て、不思議だから誰でも出來ないではないか、然るに、こゝにその反對の「誰にも出來ない平凡の術」と「誰でも出來る不思議の術」とがあるので、問題になるのである、先づ誰にも出來ない平凡の術から始めやう。

我輩嘗つて田舍の寺へ遊びに行つたことがある、すると丁度托鉢僧が遣つて來て一飯を乞ふのに出つくはした、酒を出すと、好きと見えて非常に喜び、奇聲を發して稱

々と面白い話を始め、果ては「愚僧の隠し芸を御目に掛けやう」と云ふ儘に、草鞋を脱いで本堂へ上がり、須彌壇前の太い圓柱をば、七八間ばかり離れた位置から、仁王立になつて、ぐッと睨み詰めて居たが、軈て「えゝッ」と腹の底から響き出るやうな強く重い掛聲をすると、疾風の如くに驅け出したので、あはや圓柱に打突かるかと見て居ると、こは如何に、四十五度ぐらゐの角度に體を保ッて、垂直に立つて居る柱へ、手離しでどん／＼と昇り始めるのである、其足の運びの細かい早いこと、下から上へ辷つて行くかとも見える「ふわ／＼」と一向

惘れて目口を開いて居る間に、やゝ長い圓柱を昇り切つて、身を倒樣にどんと格天井の緣へ兩足の裏面を打突け、それを力に宙返りを打つて、輕々と疊の上に降り立ち、からからと嘲ふのである。人間業は愚か、猿だつてこんな眞似は出來やしない。これは現實を見たのでなくつて、催眠術に掛つて不思議の幻影を見せられたのであるまいかと、我と我が目を疑ふ程であつた。

そこで、其行脚僧に就いて、どうしてそんな不思議の術が出來るかと訊ねた所、何も不思議な事は無い、滿足な心と滿足な體とを備へた人間なら、誰でも鍛錬すると

これが出來るやうになると、事も無げである、不思議の術ではなくつて平凡の術であると云ふ、けれども、我輩はまだ腑に落ちなかつたので、どうして鍛錬すると重ねて問へば、「忍術者にもこれの出來る者があるさうだが、愚僧の方は禪から鍛錬したのだ」と答へる。

行脚僧の說明に我輩の解釋と推測とを加へた結果は下の如くである、これは先づ、第一の「呼吸を整ふ」練習と第二の「身體、動き足疾く歩く」練習とを繰返しやつて、積極的に一致せしめ、其結果を實地に應用するので、此術を行ふに臨んでは、右の一點に依つて十分に鍛錬し

ト結果の心身を挫けて、只、腹に内より力を入れて、ヽ、彌く深く出來得る限りに息を吸ひ込み、手足の先迄息が充滿ちたかと思はれる程に、四肢五體の緊張するを待つ、さうしてから、吸ひ込んだ息をば微塵も漏らさずに、護謨毬を火に炙つたやうに張り切る體の彈力に、燃え立つやうな心の活氣を注いで、風を捲きつゝ驅け出した勢ひの、遏めやうとしても遏めることの出來ない習慣性を利用し、些とも躊躇せず一氣に柱へ驅け昇るのである。それが若し、呼吸を整へる練習がまだ十分の域に達して居ない爲めに、途中で苦しくなつて息を吐き出したら、そ

れッきり駄目である、又、呼吸だけは整つて居ても、身輕く動き足疾く歩く練習が十分の域に達して居ないと、毀れ易い容器に重い物を入れて振り廻はすやうに、體が纏らなくつて中途から轉がり落ちる虞れがある、柱の頂上迄一氣に遣り通し、倒さまに天井を蹴つて引ッくりかへる段に登るは、もう練習すべき餘地を剩さなくなつた上の業である、即ち、鍛錬して極度に至つた結果である、尤も、人間の息には張りがあるものであるから、二三丈の高さ以上には此法も利かない。

石の如く飛躍して來ると、手離して柱へ驅け昇るは、

不思議の事のやうで其實何の不思議もない、或る練習さへ積むと當然出來なければならぬ事なのである、不思議の事ではなくつて平凡の事なのである、けれども、其平凡の事が自在に出來る迄に、心身の鍛錬をやり拔く者が無いから、不思議の事として傳へられる結果になるのである。

誰にも出來ない平凡の術と云つた意味、讀者の會得せらるゝ所となつたことを信ずる、忍術に於ける鍛一と鍛二との練習を極度に一致せしめた結果は、どんな驚歎すべき技術でも出來る、以上の如きは、唯だ其卑近なる一例に過ぎぬのである。

◎誰でも出來る不思議の術

「誰にも出來ない平凡の術」を説き了ッたから、今度は「誰でも出來る不思議の術」に移らう、忍術に於ける踏の練習も、此に於ては全然右樣のものとなるのである、それは、「身輕、働き足拔く歩む練習」の中「足拔く歩む」の力に屬し、日の中に少くとも三十里を歩んで、左迄疲れを覺えぬ術である、日の中に三十里を歩んで疲れを覺えぬとは、如何にも不思議の術のやうであるが、背てこれに特別の秘密がある譯ではない、無理がなく考へた結果を、實地に應用して練習するので、極く容易く誰にでも出來るのである。

そんなら、どうして練習したらいゝかと云ふに、口で云ふより實際やつて見せた方が早判りであるが、紙上で[illegible]い、見せることは出來ないから、一つ諄々と説明を試みやう。

先づ普通の歩き方は、正面を切つて代る〴〵足を前へ出すのであるが此秘歩きの法は、進むべき前方に體の横を向け、股を開いて蟹のやうに横歩きをするので、詰まり、縦に歩く代りに横に歩くと云ふだけの事であるが、

横に股を開くのは縦のそれよりは自然で、苦しまずに開を廣くすることが出來る、演劇の助六が侍共に股を潜らせるにも、縦に開かずに横に開くではないか、そこで、足と足との中間の延長に正比例をなして、進行する道路の距離が進められるのであるから、縦に股を開いて歩くに比べて、足數の割に路の捗るは當然の事である、別段修養も練習も要らず、誰でも出來る業であるから、諸君早速遣つて見給へ、横歩きの二歩は普通の三歩に匹敵すこと確かである、二歩と三歩とは僅かに一歩の差に過ぎぬが、二十歩と三十歩とは十歩の差を生じ、二百歩と

三百歩とになると、實に百歩の差を來すのである。

併し此横歩きは、最初股を開く時には差支がないが、次に、今迄後方に從いた足を前方に進める時、即ち股が交叉になる時には、どうも具合が好くないものである、けれども、それも慣れると何でもなくなる、越後

の奇人谷村鈞堂子などは、此横歩きの遣り方が實に旨い。加之、横歩きに慣れるに連れて足が草臥れなくなる、なほ、普通では、歩きながら物を食つたり小便をしたりするに勝手が惡いけれども、横歩きはそれも都合好く出來る、それやこれやで、日の長い時分には、夜明から日暮迄に三十里歩けると云ふのは、決して法螺でないのである。

　それから、横歩きは以上の外忍術を實地に行ふに就いて非常の効を現はす、塀や壁や紙門へぴつたり體を附けて、人目を避けつゝ進退する便宜もあれば、狹い所を圓

滑に潜り抜けられもする、忍術としては最も此點に重きを置くのである、けれども、一般から見れば、此横歩は早道の法として採用すべきものである。

　遣つた結果を見れば不思議の術のやうであるが、遣り方を開けば少しも不思議でない、不思議の極は平凡で平凡の極は不思議、「誰も出來ない平凡の術」と「誰でも出來る不思議の術」と、歸する所は一つである、勿論、此横歩きも、杜、駈け昇る術と同じく、呼吸を整へる鍛練を土臺としなければならぬので、さうでなければ長く續くものでない。

兎に角、以上數ヶ條へ來つた所に依つて、忍術の練習は第一第二に屬する内容、及び第一と第二との關係が識り、會得する所となつたことを信ずる。

◎變と難とを堪へ凌ぐ練習

第一の「呼吸を整へる練習」はすべての土臺であつて、第二、第三、第四は土臺の上に建築するのである、故に、第一から第四迄皆密接の關係がありながら、第二第三第四の間は別々に取離すことが出來るが、第二も第三も第四も、共に第一と取離しては物の役に立たなくなるのである。

そこで、今度は愈々第三の「變と難とを堪へ凌ぐ練習」であるが、これも、呼吸を整へる第一の練習が出來た上

の問題な事は勿論で、此問題の内には、「食はずに飢えぬ法」「睡らずに疲れぬ法」「水火を凌ぐ法」「身體の損害に堪へる法」等を含むのである。

「食はずに飢えぬ法」はどうするかと云ふに、呼吸が十分に整つて、精力が溢れるばかりに充ち滿ち、精神にも身體にも彈力が張切つて、靜なる時は驚かず懼れざること水の淵に湛えたるが如く、動く時は撓まず怯まざること風の野を捲くに似たるを得るに至つた上で、時々一日乃至二日三日の間絶食するの習慣を養ふ、さうすると、急變に襲はれ危難に遭つて、食を取ることの出來ない時にも、此爲めに弱つて役に立たなくなることを免れられるのである、なほ、之に附屬した心得としては、今で云ふとグリコナールや何かなど、極少量で飢を凌ぐことの出來る食物の用意が必要である、忍術では、實地に有効であるから、此絶食の練習に頗る重きを置いてある、探偵、冒險家、其他苟くも大事を成さうとする人間は此練習を等閑に附することが出來まい。

それから、「睡らずに疲れぬ法」も、矢張練習の仕方は同じ方式に依るので、土臺が出來た上に、時々一日乃至二日三日の間睡らずに居る習慣を養ふのである、さうし

て、此習慣を養ひ得て、左迄苦しまずに遣れるやうに練習した結果の効力は、絶食のそれと異らないのである。

今度は「水火を凌ぐ練習」であるが、これは、水に於ては水泳持久練習、火に於ては江戸以來の名物たる火消人足の練習、此二つの外に出でないと云ふよりは、寧ろ出でることが出來ないのである、苟くも海國男兒たる日本人に水練の出來ない者は無い筈であるから、水練の點に就いては多くを云はぬが、火を凌ぐ練習に就いては一言を費さなければならぬ、勿論、火を凌ぐと云つた所で生身を以て猛火の炎々たる中を通り拔けられる譯ではなく、火焔の下、煙塵の裡、普通の人間の企て得ない所を潜り拔けるだけの練習なのである、此點に於ての火消人足の練習は、我慢第一、習慣第二、器具第三であるが、忍術に於ては、器具に依られない場合を標準として練習するので、矢張呼吸を整へる練習を第一とし、我慢は第二に居り、習慣を第三とするのである。

最後に、「身體の損害に堪へる法」であるが、これは、急變に襲はれ危難に遭うて、強く物に打たれるとか、不意に高い所から落ちるとか、手足を折るとか、負傷するとかの場合に處する法である、而も、これとて別に不思

噴の法もあるのではなく、呼吸を整へる練習の十分に出來上つたのを土臺とし、精力と彈力とを極度に振ひ起して、身體の損害に打勝ち、以て其損害から來る痛苦に堪えるのである、但し、我が敵が前に述べた「呼吸を整へる練習」を十分に遣りさへすれば、乾度これの出來ることは受合である。

以上すべて此題目中の練習は、獨り忍術者のみならず、何人も之れを行ふべきものなることも勿論である。

◎武藝柔術其他器械的練習

忍術の鍛錬に於ける第四階級に屬する「武藝柔術其他器械的練習」を説くの段とはなつた、武藝柔術の根本たる「呼吸を整へる練習」即ち氣を丹田に鎮める練習」に就いては、既に反覆して述べ盡くしたのであるから、云ふ迄も無くそれが出來た上の事として述べるのである。

忍術に於ては、武藝柔術の練習に最も重きを置かなければならぬ、武藝柔術の練習の伴はない忍術は、裸體で道中をすると同じである、けれども、第一の「呼吸を整

へる練習」を土臺として、第一第三の練習を之に加へつゝ極度に至つた結果は、身體精神相俟つて靈妙の働きを爲し得ること、武藝柔術の奥儀を究めたと同じ度に至るのである。此上は唯だ武藝柔術の形、即ち「カタ」を覺えるだけでいゝのである、だから、武藝柔術の練習を後回に附くのは、決して武藝柔術に重きを置かない爲めではないのである。

武藝柔術以下の器械的練習及枝葉の方法に至つては、忍術の傳書には説いてない、忍術の傳書には、前にも述べた通り、陰卜筮、出鱈目に禪坊主の戲語を加味したやうな無意義の文字を行列としてあるので、「睫毛に止りて目を遁れよ」「燈臺の下に萬兵を伏すべし」など云ふ謎見たいなことを多く書いてあり、實際に應用すべき些少な手段方法などは一も説いてないのである、詰まり、これ等は實地に就いて師匠から弟子へ直傳するので、傳書へ管〱しく書くの必要もなければ、亦書くの煩はしさに堪えぬから省略されたのであらう。

それに、前にも述べた通り、實際の手段方法に至つては、昔の忍術者よりも今の泥棒や刑事の方の研究が餘程進んで居るにちがひないから眞面目腐つて陰險な事を云

、も馬鹿々々しいであらう、加之、我流は忍術の學問に應ずる部分だけを、即ち心身鍛錬法としての忍術を研究するので、忍び込む術や忍び出る術や身を隠す術としての忍術を研究するのではないから、此方面の事はいゝ加減にして止さう。

されども、實際の手段方法も、たゞ其どんなものであるかを知らしむべき度に於て一斑を示すだけはよからう、術もこれは、後に至つて妖術の研究をする材料になるのであるから、讀者諸君其積りで記憶して呉れ給へ、そこで、これをも二つに分類しなければならぬ、第一、「身體の結束を物理的法則に一致せしむる事」第二、「身體の動作を物理的法則に一致せしむる事」、これである。

第一には、先づ着物で云へば、絹では歩くと音がするから柔かい木綿が好く、純然たる黒色は却つて暗夜に目立つものであるから、黒に赤みを加へた色に染めなければならぬと云ふ事を始めとし、手拭

迄も普通と異つて褐茶色にする、これも黒みを含んだ赤色であるから、頬冠をする夜の色に紛れて頭が見えなくなる利があるのである、又手拭の寸法を普通より長くするは、成るべく餘計い物を持たずして身を輕くする必要上から、手拭に種々の用を兼帶させるからである、それから忍術者の持つ刀、これにも寸法がある、塀を越える時に立て掛けて足場にする爲めや、物と物との間の距離を測る時の爲めに、柄頭から鞘尻迄の寸法を定める必要があり、刀の長さも、狹い所で働かれるだけの寸法にしなければならぬ、下緒に至る迄も、普通に隨つて襷に用ふるの外

塀を越える時、下に立てゝある刀に附いた下緒を口に啣へて、身體が塀の上にあがると共に引き上げられるやうに、寸法を特別にして置くのである、又外部の鞘は麻で作つたのを濕して穿くとか、一々記さないが種々細かい工夫があるのである。

次、第三に、暗夜に燈火を避けつゝ或る場所に忍び込むに、燈火の位置と之とに依つて物を見やうとする人の位置を考へて、自分の取つて進むべき部分を選び、燈を横にするか斜にするか、平たくするかの角度を定め、それを寸分の相違なく物理的法則に一致せしめる事から、

人に見附からうとする時、石に倚り木に倚り若しくは大地に倚つて體を隱す事など、其他種々あるのであるが、まア大抵にして置かう。

◎日常生活に應用すべき忍術と催眠術との關係

固より寸分とは云へないが、第一から第四迄略解說した所に依つて、忍術なるものゝ概念を讀者に傳へ得たことを信ずる、且つ、主として心身鍛錬法としての忍術を問題としたことも、亦讀者の會得する所となつたことを信ずる。

そこで、我輩は更に一歩を進めて、心身鍛錬法としての忍術を日常生活に應用することを、諸君に勸めやうと

思ふ、これを為すことに依つて得る所の利は、第一、呼吸を整へて精神と身體との調子を一致せしめ、事に應じて宜しきに叶ふ働きを為し得、第二、身體強健で彈力に富み、起居進退機警に輕捷なるを得、第三、變に臨み難を凌ぐの素地を作り得る事等、詰まり、擲し得るの點、用ふるに足るの材を造るに在るのである、今の世、口の先、筆の先の達者な小才の走つた人間は、掃て捨る程あるが、此第一から第三迄の鍛錬を十分に遣り抜く者は少いのである。

こゝで、忍術と云ふものは矢張催眠術のやうなもので

あるか、催眠術の一種ではないかと云ふやうな、質問を受けなければならぬ、これは、今の世に於て當然の推測である、此質問に對しては明白の解答を與へなければならぬ、さうでなければ、忍術の曖昧なものと認められるであらう。

明白に答へて云はう、催眠術の一種でも無く、催眠術のやうなものでもなく、忍術は唯だ忍術で、全く獨立した別種のものであると、呼吸を整へる練習、身輕く動き足疾く歩く練習、變と難とを堪へ凌ぐ練習、武藝柔術其他器械的練習等を極度に遣つた結果、結束と動作とを物

理的法則に一致せしめて起居進退するのが、即ち忍術である、底をたゝけば、何の奇も妙も無いのである、物理的法則以上に、人を[illegible]らしたり、人の目を晦ましたり、指を變な具合にして印を結んだりする、法術は無いのである、尤も今の所謂催眠術と同じ性質の術を應用したと云ふだけであつく、語を換へて云へば、忍術に催眠術を加へたと云ふだけであつて、忍術即ち催眠術、催眠術即ち忍術と云ふわけではない、催眠術を加味しやうがしまいが、忍術其物には些かの増減もないのである、昔の忍術者は、催眠術や白狐使ひの飯綱の術を加味したものを

妖術の新研究

◎妖術とはどんなものか

妖術とはどんなものか、此問ひて答へるとは、忍術とはどんなものかとの問ひ、答へるより、更に困難である。

先つ、妖術と云へは、印を結んで咒文を唱へると、そこに立つて居た人間が、見る間に煙のやうに消えて無くなるとか、陸地を大海に化するとか、平野に高峯を湧かすとか、白晝を暗夜にするとか、晴天に風雲を起すとか

空を飛ぶとか、水の上を辷つて歩くとか、蝦蟇、蛇、蛞蝓、蝴蝶等に變化するとかして、自在に其爲さんとする所を爲し得る術のやうに思はれる、けれども、そんな咒文一つで出來る妖術は、實際有り得るものであるかどうか、頗る怪しいものである、又、實際有るものとしても、それは我輩の知らざる所で、且つ知るを欲せざる所である。

たゞ我輩は、心身鍛錬法としての忍術を極度に練習した結果としては印も結ばず咒文も唱へずに、自然に、蝦蟇に化し、蛇に化し、蛞蝓に化し、蜘蛛に化し、蝴蝶に

化し、空を飛び、水の上を辷り、白晝を暗夜にし、晴天に風雨を起し、陸地を大海に化し、平野に高峰を湧かすことが出來ると聞く、又出來ると信ずる、否、出來なければならぬと思ふ、そこで、これから其理由を研究し、其方法を練習しやうとするのである。

仁木彈正が鼠に化けて卷物を盜む、兒雷也が蝦蟇の術を行つて好き放題の眞似をする、大蛇丸が蟒蛇に乘つて飛び廻れば、綱手も蛞蝓の大きな奴の背中に立つて、威張る、すると、大友若菜姫と云ふ御轉婆が負けぬ氣になつて蜘蛛を使ふ、藤波由緣之丞と云ふ若衆も躍起となつて蝴蝶となることを考へ出す、畢竟皆小說的空想中の產物に過ぎないのであるが、いくら空想でも、全く根も葉も無いことを事實として組立てられはしない、我輩の研究によれば、忍術を十分に練習した結果として、是等の妖術も正當に行ひ得るのである。

術も、これには、毫も催眠術らしい臭氣を帶ばず、何所迄も有形の事實を追掛けて、追つ着いた所を足場とするのである、だから、或意味を以て云へば、蝦蟇の術も鼠の術も、蜘蛛の術も、蝴蝶の術も、案外平凡なものである、案外單純なものである、けれども、其平凡は單位の平凡でなくつて、奇拔を通り越した上の平凡なのである、其單純も單位の單純ではなくつて、複雜を通り越した上の單純なのである。

そこで、愈々妖術の研究である。

◎鼠・と・な・る・術・

仁木彈正は三好屋の乖賓、荒獅子男之助は成田屋物、榮御前が迂濶に政岡へ渡した一味徒黨の連判狀、それを取戻さうと、鼠に化けて御殿へ忍び込み、旨々と口に啣へて飛び出す床下、佞人ばらの讒言にて御目通りを遠ざけられながら、斯る事もやあらんかと頑張つて居たのに出ッくはしたが最後、「うぬアたゞの鼠おやあんめえ」と云ふ儘に、男之助の鐵扇が大鼠の眉間に下る、立廻りになつてどろ〳〵と消えると、スッポンからユーと現は

れるは、朦朧たる鼠色の𧘕𧘔で口には確と卷物を啣へ眉間の疵に凄みを添へられた仁木である、「取逃したか殘念」と男之助に口惜しがらして、せゝら笑ひながら悠々と引込む沈着振、成程忍術の極意を得たものと思はれる。

又、「折しも庭の草隱れ、

現はれ出でたる數多い鼠に、床の大夫が縊殺されるやうな聲を振り搾れば、矢張り男之助にぶんなぐられたそれのやうな大鼠が、何匹となく二重に飛び上る、それ等をばら／＼と礫に打つて、其中の大將を膝下に組み敷き、「汝は時政の身内に於て、忍びに名を得し鞠川よな、首引き抜くは安けれど」とか何とか啖呵るのは、八陣守護本城の正清、引攫んで擲り出すと、鼠になつて消え失せるは鞠川玄蕃である。

演劇や小說では、眞誠に鼠になつたことにしなければ面白くないから、それを事實としたのであらうが、其齒

これは形容詞に過ぎぬのである、獸を捕へた形容詞なのである、人間が鼠に化けるのだからと云つて、繪に描くにも、形に表すにも、文字で意味するにも、人間程の大きさの鼠とする所から、實際の消息が傳へられて居るのである。

呼吸を整へる第一の練習を十分に遣り拔いたのを土臺として、身輕く動き足疾く

歩む爲に此の練習を極度に進つた結果は、人間も實際鼠となつて行動することが出來るのである、駈けること鼬の如く、柱に昇り、長押を渡り、狹い所を磨り拔けること何の苦もなく自由自在に出來るやうになり、其迅きこと目にも止まらぬ程であつたら、之を形容して鼠と云ふも差支無いのみならず、實際瞥と見た者の目に鼠を映ずるであらう、「何だらう、鼠かも知れない」と云ふ怪訝の果は、「どうも鼠より外の物とは思はれない」と云ふ推測に移り、其推測も「鼠だらう」に進ん、「鼠にちがひない」と迄に煎じ詰められなければならぬ。

かの、手離しで柱へ駈け昇る行脚僧の技などは、鼠の如しと形容すべき程度以上、遙に高きものである、勿論或る時間に限られては居るが、其時間内に於ける行動の非凡さ加減は、却つて鼠も指を啣へて引込まなければならぬ程である。

而も、これは不思議の法でも何でもない、忍術の研究の中で述べた通り、呼吸を整へる事を、始めとして、第一から第四迄の練習を十分に遣り、活氣と彈力とが身體にも精神にも充ち滿ちた上で、之に極度の鍛錬を加へ督勵を與へると、必ず鼠に爲し得るのである、其順序方法は

忍術の部で精しく説いてあるから、諸君に御斟酌を願ひたい。

◎蝦蟇の術（上）

支那に蝦蟇仙人といふものがある、兒雷也が蝦蟇の術も、此仙人の部類に屬する怪しの者に傳へられたのであらう、それは兎に角、蝦蟇の術とはどんな性質のものであるか、其術に於ける蝦蟇は、主觀的のものであるか、客觀的のものであるか、碎いて云へば、人間が直ちに蝦蟇其物に化するのであるか、若しくば、人體は人間として外部から蝦蟇の力を借りるのであるかを、先づ明らかにして掛らなければならぬ。

それには、更に先づ、一體蝦蟇と云ふものはどう云ふものであるかを知つて置かなければならぬのである、蝦蟇は蟾蜍である、夏の夕方ノソリ〳〵と椽の下から這ひ出して蚊を吸ふ所の、古怪にして頑悠なる風采を有するそれである、但し、蝦蟇仙人とか蝦蟇の術とか云ふ所の蝦蟇は、巨大なるそれを意味すること勿論である、こいつ確かに一の怪物で、人頭大のヤツになると、犬ぐらい殺される程の棒で撲ッても平氣で、大抵の刃物では切つても切れない、就中此奴何かの靈妙な力でも有つて居るのであるまいかと思はれるは、それを平な土間に置いて、

米を搗く大臼を伏せ、更に其上に大石を載せ得る限り載せて、外から肉を引ッくりかへしてやらなければ、どうしても出られないやうにして置いても、一晩經つて翌る朝に見ると、臼も石も元の儘で何の變動がないのに、肝腎の蝦蟇だけは、煙となつたか霧となつたか、掻き消す如く影も見えないのである、これは我邦の實驗した所であるから、確かなる事實と斷言し得られる。

詰まり蝦蟇の術と云ふのは、客觀的のものでなくッて、主觀的のものなので、外部から蝦蟇の力を借りるではなく、掻き消す如く形を見えなくする點に於て、蝦蟇と同

じ働きをすることを意味するのである、それから、昔の毛唐人の諺に、蟾蜍月を見て飛ぶとか云ふことがある、蟾蜍は「ひきがへる」即ち蝦蟇である、なほ一層進んでは、俗に人魂が飛ぶと云ふのも、ありア人魂でなくッて蟾蜍が月を見て飛ぶのだなど丶、出鱈目の極を云つて居る、即ち、燐火の飛ぶのも蝦蟇が飛ぶと牽強けるのである、其實蝦蟇は寧ろ鈍いもので、小さい蛙の制にも飛べやァしない、蝦蟇月を呑むと云ふは、例の怪物的相格の奴が、三日月の宵にでも、空に口を向けつゝパクリ／＼やッて居るを見ての形容から來たものであらう、これら

の事から、無理に蝦蟇と月との間の關係を作つて、果ては蝦蟇と月とを混同し、月は蝦蟇の化けたのでゞもあるやうに天蟾だの玉蟾だのと名附けるやうになつた、そこで、蝦蟇の術と云へば、形を見えなくすることの外、自在に飛行することを意味するやうであるが、飛行の方は蝦蟇其物に對しても架空の想像たるに過ぎぬと共に、小說化されたる蝦蟇の術なので、實際の蝦蟇の術は、己れ其所に在りながら、形を人の目に見えなくして、消え失せたやうに居なくなることである。

形を人の目に見えなくして、消え失せたやうに居なく

なるとは、如何にも神秘不可思議で、印を結び呪文を唱へでもしなければ出來得べからざる事のやうであるが、それが正當に出來るから面白いのである。

◎蝦蟇の術蜘蛛の術其他（下）

そんなら、どうして、形を人の目に見えなくして、消え失せたやうに跡なくなることが出來るかと云ふに、呼吸を整へる練習と程度に遣つて、臍下丹田に氣を鎭めることを得ると、十分に息を吸ひ込んで吽とこたへて居る時間内だけは、精神身體共に、靜止不動の極、無機物と同じくなることが出來るのである。既にこれが出來る以上、其人若し夜中庭石の間に身を潜めたら、全く庭石と同じ物になッて見えなければならぬ筈である、木立の中

に身を潜めたら、全く木立と同じ物になッて見えなければならぬ筈である、夜中庭石の間に身を潜めて人目に觸れぬを得る蝦蟇は、人間より一歩を進めて此法を會得したものである。

實際精神身體を併せて無機物の如くに凝定せしむると云ふことは、一通りや二通りの鍛錬の結果に出來得る術では無く、感覺の非常に鋭敏な者には、どうしても温みと血の通ひとを感じ知られるを免れぬのである、けれども、鍛錬って其極に至ると、僅かに、息を十分に吸ひ込んで下ッ腹に力を入れて居られる時間だけは、無機物と

異らぬ凝定の域に入ることが出來る、論より證據、諸君自ら試みて其妄ならざるを知り給へ。

豈獨り庭石の間のみならんやである、隱術者が何もない平面の大地の上でも、ぴたりと吸着いて俯向に突伏す時には、忽然消え失せて見えなくなると云ふが、此法から推すと何の不思議も無いのである、進んで、燈火の位置も人間の視線との關係の物理的法則に通じ、之れを避くべく節に合するの遮蔽をなすことを得たなら、庭石や木立の間でなくとも、大地の上でなくとも、座敷の隅でも、廊下の端でも、どんな所でゞも、消えて無くなるに

手間がかゝらない、蝦蟇の術とは之に外ならぬのである、否、忍術に於ける蝦蟇の術とは之を云ふのである、この外に云ひ傳へられる蝦蟇の術は皆小説的空想の產物である、吸ひ込んだ息を保つ間、形を人の目に見えなくすることが出來るゆゑ、どんな變幻出沒でも逞しうし得る筈である。

其他、蛇の術と云ひ蜘蛛の術と云ひ蝴蝶の術と云ふも、歸する所の點は皆同じで、一の根源から發するのである、蛇の術と云ふは、直に自由自在にどんな狹い所でも細い所も通過し得る點から意味し、蝴蝶の術と云ふは、隨々と身輕く動いて、此所にあるかと思へば忽ち彼所に在るが如くなり得る點から意味するので、其名の相違は唯だ意味する點の相違に過ぎぬのである、又、蜘蛛の術と云ふのも、理屈は別に變らないが、柱、駈け上つたり、長押の上を駈けて歩いたりすることを或場合には形容して鼠の術と云ひ、又或場合には蜘蛛の術と形容するのである、けれど、蜘蛛の術は在つて鼠の術は無い一

つの技は、掌や胸や腹や腿や脚の肉の間を凹まして眞空を造り、壁や羽目の中途へぴたりと吸ひ着いて、下へ落ちないことである、これは練習が至難な上に、第一體質に依るのであるから、古來爲し得る者が極めて少ない、我輩も、たつた一度僅かに三十秒時間ばかり保ち得た者を見ただけである。

次には火遁の術を研究しやう。

◎火遁の術

八犬士の一人犬山道節は火遁の術を能くしたとある、けれども、それは左道と云つて正當の道ではないから、犬士の群に入ると共に斷然術を使ふことを廢して、傳書を燬き棄てたとは、馬琴親仁の小説的構想で、眞實を云へば、火遁の術は意義明瞭な正當の道なのである。

姦雄曹操を翻弄した妖術使ひの左慈も、天遁地遁人遁三卷の天書を得てから、通力自在なるに至つたと囁いて居る、天遁とは、日に倚り、月に倚り、星に倚り、雲に

倚り、霧に倚り、風雨雷電に倚つて、跡を晦ますこと、地遁とは、山に倚り、川に倚り、水に倚り、木に倚り、草に倚り、石に倚り、砂に倚つて、跡を晦ますこと、詰まり、物に倚つて跡を晦ますことを「のがれる」と云ふ遁の字を以て意味したのである、而も、此の遁の字の附く術は、皆印を結んだり呪文を唱たりすると自然に出来るやうな、怪しいのではなく、正常な理詰めの結果なのである、就中最も行ひ易くて奏功の確實なは火遁の術である。

火遁の術とは、不意に發した火を便りに姿を隠す事で

犬川荘助が道節へ切り附けると、道節が閃然と身を躱す、切先鋭つて戞然と石へ切り込む、パッと火花が走る、すると其火を便りに道

節は身を隠した、これは八犬伝の道節であるが、實際確かに出来ることなのである、實際は、火さへ得れば其刺戟に依つて靈妙不可思議の

術が出來るといふやうな神秘的意味ではなく、不意に發した火に依つて、自分を凝視する若しくは追窮する人の視線を之に轉ぜしめ、一瞬間に非常なる敏捷の動作を以て、其人の視線の及び得る範圍以外に身を隱ゝるのである。

で、此實際の火遁の術は、不意に發した火を利用することもあるが、それは特別の場合なので、自分を凝視する若しくは追窮する人の視線を他に轉しむべく、先方の不意に出でゝ、思ひも寄らぬ方面に、突然自分の手で火を出すのが尋常である、自分の前でも、横でも、身を退かうとする反對の方面でも、其場合の宜しきに隨つて、燐寸でも何でもいゝから、手早く火を點す、出し拔けであるから、先方の視線は一時之に引かれる、其間に素早く身を脫するのである。

木に倚つて遁れるも、草に倚るも、石に倚るも、金に倚るも、器に倚るも、風雨雷霆に倚るも、皆一時物を藉りて敵の眼を之に集めしむるので、運用は同じである、

秀吉蜂須賀小六に隨つて居る時分、若年を始め十餘人の者と一緒に或る家へ泥棒に入つたが、引上げの際たつた一個出後れて大勢の家人に引捕へられやうとした、此

時十五にも足らぬ小僧の秀吉は、早速の機智、有り合ふ可なり大きな石を抱え上げて、井戸に臨み呀と聲を放ちつゝ、轟然と投り込み、其儘一方へ身を退いた。果して、「それ泥棒が井戸へ落ちた」と、たゞ井戸を指して人々が集まつて來る、其間に秀吉は安々と逃げ出ることを得たのである。又、約束して小六の刀を盗みに入る時にも、軒の雨垂の下に笠を置き、小六に其方を警戒させて朝迄眠らせず、眠方になつて、笠を打つ雨垂の音を聞きながらトロ／＼とまどろむ隙を見濟まし、雨垂を反對の方角の家内の方から忍び込んで、旨々と刀を盗み取つた、これらは自然い「遁」の字の附く法術の堂奥に入つたもので、此法術は甚だ廣い範圍に應用することが出來るのである。

妖術の研究は、これで終りとする。

忍術の實地試驗

◎銀月自ら忍術者の實習を見る

尚ほ忍術の或る部分の別名なる妖術に就いては、既に其大要を述べ得た積りである、且つ、其門に入り堂に昇るの道をも、讀者が會得せらるゝやうに說き示した積りである、之に依つて十分の練習を積んだら、精神及び身體に缺點の無い者は、誰でも其奥に達しられる筈である。

けれども、「離して柱へ掛け外る坊主の事の外は、殆

んと皆其理のみを說いて其實を示さなかつた、そこで、此一回は、自分が嘗て忍術者の實習を見た時の記事を以て充たそうと思ふ。

數年前、我輩と同趣味の拗ね者氣紛れ者及び奇を好む徒が七八人、或家に會した事があつた、落花の時節で、雨の降り頻る夜であつた、餘り明るくない蠟ランプを圍んで、各々珍奇の話題を拈り出し、夜の更くるを覺えなかつたが、其中の一人が其連れて來た或者を指し、此男は忍術を研究して居る」と云ひ出した、場合も場合、集つた人間、人間であるから、一同之を聞いて、打興ずるこ

と一通りでない、「矢張り魔法と云ふ類のものか」の「催眠術を應用するものか」の切支丹バテレンの法と云ふものとちがふか」のと、種々の質問が出た上、「何でも無いものだから此所で遣つて見せやうか」と云ふ、「そりァ面白い、遣つて見せて呉れ」と一同が乗り氣になると、其男は物をも云はず立ち上がりさま突然フツとランプを吹き消した。

そこで、一同大騒ぎとなり「これァ非道ひ」と憤る者もあれば、「ランプを消して身を隠すのなら、忍術に依らなくつても出来る」と嘲る者もある、それでも、件の忍

術者は何もしないから、騒々しい、ランプを點けやうぢやァないか」と一人が燐寸を擦つた、パッと明るくなる、すると、忍術者の床の間に突伏して居るのが見えた、「これァ大笑だ、忍術と云ふものはそんな詰らないものか」と一同大笑ひになる。

此時、一同の笑ひ聲を壓して、一種傲慢なやうな強く大なる笑ひ聲が一座の中に起つた、愕りして見ると、豈測らんや、忍術者は車座の中に雑つて、巻煙草を吹かし乍ら小気、胡座を掻いて居るのである、これァ不思議だ、一個の人が二個になつた」と怪み訝るべき所だが、對

「睫に止まつて目を逃れよ」の、「燈臺の下に伏兵を伏せべし」のと云ふ忍術の學口を聞いて、非常に面白いと思つたのも、此時である、これは、誰でも容易く出來る事のやうで、實際なか〳〵さうではない、第一、立上つてランプを吹き消した時には、まだ羽織を脱ぎさうな氣色を見せてはならないのであるから、次の一瞬間には極めて手早く脱いで、豫て目を附けて置いた床の間の唐獅子へ、手際よく、羽織が手前になるやう、ふハりと投げ掛け、人々が突然ランプを吹き消されて、騒ぐやら嘲るやらの大騒ぎのいまだ收まらぬ間に、逸早くも前の[illegible]席と異る位置

人間はそんなに迂闊なものではない、之を見ると共に、床の間の上のは、其忍術者が今迄着て居た羽織を脱いで、陶器の唐獅子に打ち着せたものと判つた、忍術者得意然として曰くさ、「忍術と云ふものはこんな詰らないものさ、だけど、床の間の羽織に諸君の目が附いたか附かぬかに僕が此所に居て大聲に笑つた一瞬間は、諸君にも案外に感じられたらう。詰り此瞬間を把握するのが忍術の本義で、此瞬間の把握の應用し方に依つては、世界を引つくりかへすことも出來るだらう」と。

我輩が、忍術の研究に興味を感じた動機はこれである、

を取つて割り込みつゝ空咳を吹かし、[illegible]、[illegible]すを招[illegible]て、人々の視線が床の間に注ぐ一瞬間に投ずべし、下ッ腹に力を入れて吸ひ込んだ息を漏らさず、澱み無く血の通ひ無き無機物と同じくなつて待構へなければならぬのである、此に於て、忍術に於ける[illegible]一から四途の[illegible]は、こんな何でも無いやうな事にも土台となつて居ることが解るであらう。

忍術妖術と仙術

◎忍術者が心身鍛錬法の或一面

忍術妖術に就いての研究も、前回で結末にする積りであつたが、今一つ興味ある題目を遺したから、是一回だけ追加さして戴かう。

忍術者が心身鍛錬法として行ふ事の中に、「仙家伝来の術」と称するものがある、それには二法あつて、一は「飛行身を作る法」、他の一は「気血を純潔ならしむる法」である。「飛行身を作る法」とは、敢て鳥類のやうに自在に

空中を飛翔する事を意味するのではない、鍛錬又、飛行者の飛行が先づ完全の域に達する迄は、人間として肉身だけで鳥類の眞似が出來るものではなく、これは唯だ、一丈二丈の淵を飛び越したり、普通人に出來ない高い所へ飛び上つたり、高い所から飛び降りたりすることを、誇大に形容して斯く云ふのである、そこで、飛行身を作る法とは、今の競技運動に所謂「高飛」「幅飛び」などを極度に遣り得るやうに、身體を鍛錬する法と云ふ意味なので、これには、仙家に於て種々の修行があり、脂肪分少なくつく體に力を附ける食物を取る事から、一種の深呼吸法

其他數へ立てるに澤山あるが、就中肝要なのは一に置かれる、凡胎を脱すると云つて、體の水分と脂肪分とを拔き取る事である、其の法は重裘即ち重い皮衣を着て、山谷の間を無茶苦茶に馳せ廻るので、斯くすると、餘計な水分、脂肪分とは汗となつて排出せられ、皮衣に吸ひ取られ、體が締つて強くなるのである、凡胎即ち安樂に暮らして來た身體には、必要以上の水分脂肪分が貯へられてあるもので、激しい運動をすると、それらが燃燒作用を起して水蒸氣及炭酸瓦斯となり、之が爲めに苦痛を感ぜしめ、息切れを起さしむることは、今の組織の敎ふる所ではな

いか、して見ると、古い仙家の着眼點は偉いものと云はなければならぬ。

「氣血を純清ならしむる法」は飛行身のやうな不凡の事ではなく、これは些と變つて居る、今の所謂精神療法の部類に屬するものであらう、此法を修するには、先づ穏やかに胡坐を掻いて無念無想の境に入り、それから、自分の頭腦の眞上に當る天界から極めて清く冷かな泉が降り始めたと假定する、想像の力を何處迄も發揮してそれを事實と思ひ込むに至る、そうして、それが段々と降りて頭に及ぶ、黒く粘つた凡血を驅逐して、此天の泉が段

々頭腦に滿ち渡り、頭から頸に降り、頸から胴に及ぼし、胴から脚に及ぼして降るに隨ひ、凡血を下に逃げさせ總には體中悉く天の泉を以て滿たし、凡血の滯留すべき餘地が無くなつて沸々焉と十本の足の指先から外へ出る、此想像を幾度となく繰り返すと、最後には血色純明神氣清爽朗として、玉山夜行くが如き段に入ることが出來ると說かれてある、具體的に云へば心身共に無病健全で、明確に考へ活潑に働くことが出來ると云ふのである、なか〳〵面白いではないか。

忍術者が、以上の所謂仙家の二法を心身鍛錬に應用す

るとは、頗る旨く考へた說である、一つは生理的で他の一つは心理的、生理的と心理的と相俟つて鍛錬に資するとは、拔目の無い態度である。

昆野勝武氏に與ふる書

昆野君足下、僕未だ足下と相識らずと雖も、幸ひにして足下の或一面を熟知するの機會を得たり、爾り、或一面に過ぎずと雖も、恐らくは是れ足下の全部を發揮して示したる或一面なりしなるべし、故に、僕は足下を見たりと云はんことを希ふ、更に進んで、足下を知りたりと云はしめられんことを望む、而も其は最近五月十四日の夜也。

僕は、柔道家としての足下と拳闘家としての米國水兵

との試合を見たり、入場料の日本に於ける他の興行物に比較して餘りに不廉なると、外字新聞に廣告せざりしとの故に、新富座の觀棚が特等及び一二等の上客を多く迎ふること能はざりしを遺憾とすと雖も、是れ足下の直接に與り知らざる所なるべく、且つ、之に依つて、毫も柔道家としての足下の價値を增減する無し、加之、燕尾服を着けたる司會者の場慣れざるを以て、舞臺面の見付に影響を及ぼすこと少なからざりしを、足下に向つて責を問ふ程、僕は極端に苛酷なる者にあらず、僕は唯だ、足下が千鍛萬錬を經たる絶倫の精力と、鬼神を泣かしむるに

足れる至妙の技術とを以て、古代希臘の彫像にインスピレーションを與へたるが如き海外の力士を遇すること、恰も狗兒を弄ぶに似たるの壯觀に心醉し、拳を握つて爪の掌に透るを覺えしのみ。

而も、勝敗の數を算するに至れば、三十二點に對する三十二點を以てして、未だ一高一低の位置を定むるを得ずと云ふ、咄々何等の怪事ぞ。

然れども、退いて而して思へば、是れ大に據る所あらざるにあらず、元來彼我技術の範圍を異にし、加減乘除して以て兩者の相合すべき點のみを選ばざるべからざる

困難なり、其結果として、彼は脾腹若しくは頸を打ち得たるを以て勝名を占むべきに對し、我は彼が拳頭を避けつゝ躍進して彼を擲着するに至らざるべからず、其制限の彼に容易にして我に困難なること、差や未だ闘はざるに瞭然たる也、故に、足下若く闘ふと雖も、最初に於て彼の拳頭を避くべく頻りに身を轉ずるの勢あり、而も、一旦閃電的動作を以て彼の懐裡に躍入し、彼を捉へて擲着するに至りてこそ、猶ほ且つ彼には投げられ乍ら拳頭を用ゐたるの餘地あるに、我は擲着せし上に壓住を加へずんば了れりと爲すことを得ず、其難易の差、闘つて而して

後に益々明かなるを知る、足下十戰十勝せるが如きの觀ありて、其實際に勝敗相半ばするを得たるに過ぎざるもの、亦以て無きにあらざる也。

我が柔道亦當身の術ありて拳頭を用ふと雖も、是れ已むを得ずして遁るべき奇道にして、決して道の正なるものにあらず、然るに、拳頭を用ふるは彼の術の全部也、拳頭を用ふるの外に拳闘術ある無し、況んや、眞の闘ひに當りては、猛々たる拳頭の一打能く虎の如きの壯漢を殺すに足ると云ふに於てをや、故に、柔軟にして肥厚なる手袋に包みたる手に依り、フートボールの如き音響を

帶ぶる一打を與ふるを以て勝となすは、外觀兒戲に類するに似て、其實大に價らざるものある也、之に對して、我も亦手裏に包みたる手を用ひて當身の術を行ふを可なりとすべきが如しと雖も、彼の道の正なるものに對するに我の道の奇なるものを以てするは、既に武士的作法を蹂躪したる態度たるを免れず、加之、手套を隔てゝは當身の術も肉彈の効を失ふべし、故に、彼の一打に對するに我の一擲を以てすること、必ずしも權衡を失せるの惻隱にあらずとせん。

果して然らば、足下鬼神を泣かしむる至妙の技術あり

とも、敵にして若し閃電の如く疾く飛ぶの快手を有せば、其躍入して彼を擁着するに至るの數秒時に於て、彼をして脾腹或は顎に一打を加へしめざるは、土砂其他の物質を用ひずして、流水の低きに就くを遏めんとすると同じく、到底不可能の事なるに似たり、一歩を進めて云へば、僕が見たる試合に於けるが如き制限を以てせば、必ずしも柔道を以て拳鬪術に勝ち得べきものと、定むること能はざるに似たり、是れ殆んど先天的約束也、足下が米國水兵と鬪つて同點の無勝負に了れるもの、寧ろ成功の部類として見るべき也。

此に至つて、僕は一種云ふべからざる感想に打たれざるを得ず、打たれて而して後に、敢て足下に向つて重大なる責任を双肩に負はれんことを求めざるを得ず、开は何ぞや、以上の如き制限の下に於て、柔道を以て必ず拳鬪術に勝つべきを定むるは、縱令先天的約束上不可能の事なりとするも、足下は必ず彼に一點をも與へずして、全勝を占めんことを期せざるべからざる也、乞ふ、僕をして其故を述べしめよ。

人と人と相鬪ふに於て、柔道をして、世界何れの人種が用ふる何れの術に比較するも、嶄然として他をして攀

づるを得ざらしむるの高所に位置せりとの、絶大なる抱負を失はしむべからず、此抱負の失はるゝ日は即ち柔道の亡ぶる日也、柔道の亡ぶる日は即ち日本の士氣地に墮つる日也、日本の士氣地に墮る日は即ち日本の亡ぶる日也、故に、柔道の神聖を重んずるを以て、他の術との優劣を試むることを謝するに於ては論無し、旣に試むる以上は、理をも法をも超絶して、鬼となりても神となりても、必ず彼に勝たずんば已むこと能はざる也、何となれば、之を大にしては日本の存亡問題に關するを以て也。

古人は、精神一到何事か成らざらんと云へり、足下に

して、眞に、粉骨碎身斃れて而して已むの徹底せる決心を有し、必ず彼に勝つべきの方法を研究して之を練習せば、今後更にアボット氏に十倍するの勁敵來るありとも、亦何の畏ることか之れあらん。

果して然りとせば、其研究すべき方法如何、彼は双手を包むに大嚢を以てして、更に襪を足に穿ち、疊の上の試合に於ては、寧ろ實力以下に轉倒し易き弱點あれば、之を倒すこと左迄の勞力にあらざると共に、倒さるゝこと亦左迄の痛苦にあらず、故に、之を倒すべく躍入する一瞬間に於ける足下の精力の消費せらるゝこと夥多なる

に比例して、之に酬はるゝ手答へ甚だ薄弱に、之が爲に足下は彼に倍するの疲勞を贏し得て、彼は常に進擊を敢てするの餘勇を存せり、此點に於ける損益の差は蓋し非常にして、試合の制限に於ける難易の差よりも、結果する所更に甚深なる也、此に於て、僕は足下の研究も亦此點より歩武を進めざるべからざるやを謂ふ、僕は、何故に足下が双手を用ひて彼が飛ばし來る右手を捉へつゝ左方に身を轉じ、而して、後さまに彼が身に輪を描かせつゝ、振つて〳〵振り廻はしたる揚句の果は、惰性を利用して引擔ぎ、彼が左手を用ふる便宜を得ざる中、逸くも

弾みを打たして強硬に之を撫着せざるかを疑ふ、斯くして彼をして速かに疲勞を覺えしむることを計らずんば、足下の精力の消費せらるゝこと、彼に比して著るしく多く、試合の度數を重ぬるに比例して、終には非常の懸隔を生ずるに至らん。

今や足下は、騎虎の勢ひ、日本の柔道を代表して外來の客に對するの位置に立たざるを得ざるに至れり、僕豈一のアポット氏に對する作戰計畫のみを言ふ者ならんや、足下が一國に有數の柔道家なるに對して、アポット氏は單に一軍艦に有數の拳鬪家なるのみならず、而も足下は

敵の疲勞を慮りて、之と寛容なる互角の戰ひをなす、明日若し他より一國に有數なる拳鬪家來つて鬪ひを挑まば、足下果して如何なる態度を以て之に當らんとするや、然れども、僕の述ぶる所門外漢の言のみ、正鵠を失せる點多からん、希くば、百中九十九の誤れるを捨てゝ、百中一の當れるを取れ、不備。

最新研究 忍術と妖術 終

明治四十二年八月十五日印刷
明治四十二年八月二十日發行

忍術と妖術
定價金廿五錢

著者 伊藤銀二

東京市京橋區中橋廣小路六番地
發行者 前川又三郎

東京市京橋區五郎兵衛町二十三番地
發行者 杉本要

東京市京橋區弓町廿四番地
印刷者 高築殷次

東京市京橋區弓町廿四番地
印刷所 三協印刷株式會社

東京市京橋區中橋廣小路六番地
發兌元 梁江堂
振替本局五七七